

## 都市型災害復興イベント「神戸ルミナリエ」の多角的検証と新しい企画提案の研究

## URBAN DISASTER RECOVERY EVENT, "KOBE LUMINARIE" VALIDATION STUDY OF THE NEW PLAN PROPOSED MULTILATERAL

.....

かわいひろゆき デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授  
 見寺 貞子 デザイン学部ファッションデザイン学科 教授  
 相澤 孝司 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授  
 柗 伸江 元・芸術工学研究所 研究員

Hiroyuki KAWAI Department of Visual Design, School of Design, Professor  
 Sadako MITERA Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Professor  
 Takashi AIZAWA Department of Product Design, School of Design, Professor  
 Nobue HIIRAGI Research Institute of Arts and Design, Former Researcher

.....

## 要旨

阪神・淡路大震災から16年がたち、社会の変化とともに、鎮魂と震災復興を目的に始められた神戸ルミナリエの主旨や具体的手法に再検討が必須の時期となった。

本研究は、アート&デザインの分野から新たな企画を提案・実施することにより、時代や住民の要請にあう神戸ルミナリエのあり方を探るとともに、震災から学んだ「命の尊さ」や「人の絆の大切さ」を次世代に伝えることで、幸せな社会づくりに貢献する企画デザインの可能性を模索するものである。

具体的には、以下の5つの企画を実施し、成果を上げることができた。

1. みんなで灯す「記憶」のモニュメント
2. 大学生が育てた「はるかひまわり」配布
3. 鎮魂と絆のブルーキャンドル・パフォーマンス
4. 「記憶」の響きコンサート
5. 1.17を語る「魂」の言葉

## Summary

16 years after the Great Hanshin Earthquake, as well as social change was necessary to reconsider the timing and specific methods and spirit of the Luminarie Kobe earthquake reconstruction initiated for the purpose of the requiem.

This study, conducted by the new planning proposals from the fields of art and design, as well as explore ways of Kobe Luminarie meet the demands of the times and people have learned from the earthquake, "the preciousness of life" and "human the importance of the ties, "you can tell the next generation is intended to explore the possibility of planning, design, happy to contribute to society.

In particular, planning and implementing the following five were able to achieve results.

1. Candle everyone to "remember" monuments
2. Fostered by university students, "Sunflower far," Distribution
3. Blue candle requiem and performance bonds
4. "Memory" of concert sound
5. Talk about 1.17 "soul" of the words

## 1) 研究の目的

阪神・淡路大震災から16年。時代の移り変わりとともに、社会状況もすっかり変化した。鎮魂と震災復興を目的としてはじめられた神戸ルミナリエも16回目となり、主旨や具体的手法を再検討する時期をむかえている。

一方、震災から学んだ「命の尊さ」や「人の絆の大切さ」は、被災地神戸の財産として今後も継承し、街づくりやコミュニティづくりに生かしていかなければならない。

本研究は、アート&デザインの立場から阪神・淡路大震災が残した財産を、多くの人々と共有する新たな企画を提案・実施することで、幸せな社会づくりに貢献することを目的とする。

## 2) 概要

遺族や被災者の体験談を聞く「震災セミナー」を学内で開催。さらに、神戸ルミナリエの感想や意見をネットから収集するとともに、周囲の人々への聞き取り調査をおこなった。

その後、定期的なミーティングを重ね企画内容を検討し、神戸ルミナリエ組織委員会にプレゼンテーションを実施。

来場者が神戸ルミナリエの主旨を再確認することをコンセプトに、「観るルミナリエから参加するルミナリエへ」というスローガンをたて、観客参加型の企画を提案した。

検討の結果、以下の5つの企画がオフィシャル・パフォーマンスとして承認され、神戸ルミナリエの期間中（2010.12.1～13）、会場内に「鎮魂のゾーン」を設けて実施された。

また、1と2は1月17日に開催された「1.17のつどい」でもおこなわれ、神戸ルミナリエと1.17のつどいの連動が図られた。

1. みんなで灯す「記憶」のモニュメント
2. 大学生が育てた「はるかひまわり」配布
3. 鎮魂と絆のブルーキャンドル・パフォーマンス
4. 「記憶」の響きコンサート
5. 1.17を語る「魂」の言葉

※付随活動：「HANDSの認定NPO取得記念フォーラム『死をみつめて、いまを生きる』」（6.6 神戸市勤労会

館）と映画『その街のこども』試写会とトークイベント」（11.12 神戸芸術工科大学 吉武ホール）に参加。

## 3) 震災セミナー

阪神淡路大震災について学ぶため、HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」の協力を得て、被災者の体験談を聞く「語り部の会」を学内で開催。加えて、震災に関する映像鑑賞や震災跡地の見学を実施した。

出演者は以下の通りである。

1. 安岡正雄 神戸国際観光コンベンション協会 観光部長(4.27)
2. 白木利周 HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」理事(5.11)
3. 加藤いつか HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」理事(5.25)
4. 中島喜一 HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」理事(6.8)
5. 臼井真 神戸市立西灘小学校教員『しあわせ運べるように』作詞作曲(6.22)
6. 上西勇 HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」理事長(7.6)
7. 大下幸夫 HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」専務理事(7.20)
8. 岸本昌市 HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」理事(8.3) ※敬称略

そのほかに以下の見学と鑑賞会を実施した。

1. 人と防災未来センター見学(5.4)
2. メリケンパーク震災跡見学(5.14)
3. NHK「震災15年～命をみつめる 心をつなぐ」鑑賞会(5.18)



図1) 第1回震災セミナー 図2) 人と防災未来センター見学

## 4) みんなで灯す「記憶」のモニュメント

震災発生時刻の5時46分を示す時計の長針と短針の巨大オブジェを制作。表面に、西脇の大城戸織布で開発された微電流が流れる特殊な布を張り、犠牲者と同数の6434個のLEDを観客がひとりひとつずつ刺すことで、輝く時計の針を完成させるというパフォーマンスをおこなった。

12月1日のハートフルデーから13日最終日までの期間

に、短針に 719 個、長針に 1971 個、合わせて 2690 個の LED が灯された。

参加者には記念として、オリジナル・メッセージカードと自宅で飾るためのカード立てを配布した。

また、LED の返送を希望する 353 名には、後日 LED を送り届けた。

さらに、現地で参加者に協力していただいた 300 円募金が総額 881,220 円となり、全額を「ルミナリエ募金」に募金した。

会期中の現場や事後にもメールなどで応援のメッセージをたくさんいただき、“観るルミナリエ”から“参加しともにつくるルミナリエ”を目指した本プロジェクトの成果を、あらためて確認することができた。

告知不足もあり、当初予定していた 6434 個には達しなかったが、まずまずの成功といえるのではないだろうか。

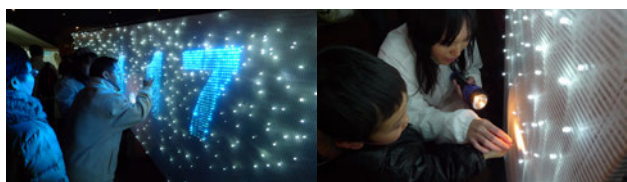


図 3) 会場で LED を刺す来場者 図 4) 学生による補助



図 5) LED とメッセージカード

### 5) 大学生が育てた「はるかひまわり」

HANDS 阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」の協力により学内で「はるかひまわり」を 1200 株栽培。「はるかひまわり」とは、震災で亡くなった小学 6 年生のはるかちゃんの家の跡地に咲いたひまわりを毎年受け継いで咲かせつづけているものである。

育てた花から種を収穫し、6~8 粒ずつメッセージカードとともに袋詰めし、「記憶」のモニュメントの参加者に、無料配布した。命を育て未来につなげる本プロジェクトは、命の尊さや人の絆の大切さを考える上で、非常に実のある体験となった。



図 6) 種の仕分 図 7) 配布した種とメッセージカード

### 6) 鎮魂と絆のブルーキャンドル・パフォーマンス

昨年につづいて 2 回目となる本パフォーマンスは、神戸ルミナリエ会場内に灯されつづけている「1.17 希望の灯り」周辺に約 1000 個の青いキャンドルを灯すというもので、ルミナリエ初日の 12 月 2 日と最終日 13 日の 2 日間実施された。

あいにく両日とも天候に恵まれなかったが、降りだす小雨のなか、学生と観客が一緒になって点灯することで鎮魂のひとつきをともに分かち合うことができた。

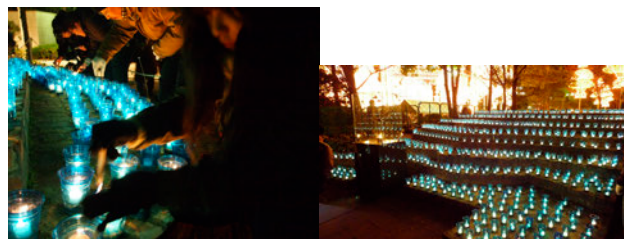


図 8) キャンドル点火作業 図 9) キャンドル点灯風景

### 7) 「記憶」の響きコンサート

「1.17 希望の灯り」周辺と噴水広場の特設テントにて 1 日に 4~6 回、20~30 分間のコンサートが毎日催された。

とりわけ特設テントでは、「1.17 を語る『魂』の言葉」で語り部を担当する遺族の方々と学生たち、そして観客と一緒に震災の歌『しあわせ運べるように』を合唱した。

また、各回の合間に、学生が震災についての感想文を朗読するといった交流も図られた。



図 10) 特設テントでの合唱 図 11) 「希望の灯り」周辺での雅楽

本プロジェクトは、神戸芸術工科大学と神戸市看護大学、

神戸海星女子学院大学、大阪音楽大学の4大学が連携しておこなわれた。

#### 8) 1.17を語る「魂」の言葉

4月から8月までの期間、震災を学ぶために催された「震災セミナー」で、遺族の方々から直接に体験談を聞くことができ、発せられる言葉の重さに感動したことから本プロジェクトが企画された。

HANDSの協力を仰ぎ、遺族の方々のほか「NPO法人KOBE観光ボランティア」の方々にも加わっていただき、12月1日のハートフルデーからルミナリエ最終日の13日まで、連日、語り部の会を噴水広場の特設テントで開催した。

会のはじめには、「1.17希望の灯り」から分灯された蠟燭の灯りを、大勢の観客の手で20~30個の蠟燭に灯し、全員で震災の歌『しあわせ運べるように』を合唱。その後、1~3名の方から震災体験を聞いた。

神戸ルミナリエの会場で遺族が被災体験を語るののは、はじめてのことであった。

このことにより、私たちは16年前の阪神・淡路大震災を再認識することができ、命の尊さや助けあって生きることの大切さについて考え語りあう貴重な機会を持つことができた。

このプロジェクトは、新聞やテレビ、ラジオなど多くのマスコミに『ルミナリエの原点回帰』として取り上げられ、日ごとに観客が増え、多くの反響が寄せられた。



図12) 語り部の会



図13) ラジオの生中継

#### 9) 1.17のつどい

神戸ルミナリエ期間中に2690個のLEDが灯された『記憶』のモニュメントの長針と短針を、2011年1月17日におこなわれた「1.17のつどい」の会場に展示。

ルミナリエの時には別々に設置されていた長針と短針が、この時、初めて時計のかたちに組み立てられた。

17日の早朝5時46分の黙祷とともに点灯。震災発生時刻を示す時計の針が白色LEDの光で輝き、凜とした冬の暗い公園にくっきりと浮かび上がった。

光は終日点灯され、21時の閉会とともに消された。

私たちは、前日16日に会場で竹筒並べを手伝ったあと、深夜から17日にかけて交流テント内に待機していた。そのため、訪れる多くの方々と対話し、震災に対するさまざまな思いを聞くことができた。



図14) 「1.17のつどい」

図15) 2690個のLEDが灯された



図16) 会場内に設けられた交流テント

#### 10) まとめ

すべてのパフォーマンスは非常に好評で、予想を上回る評価を得ることができた。実施中に、「新聞をみてきた」と声をかけてくれる人も多く、「頑張ってる」という励ましや「ぜひ来年も」という応援の声もたくさんいただいた。

神戸ルミナリエは、1日4時間ほどの点灯時間内に全国から平均30万人が訪れるビッグ・イベントだが、16年という歳月の経過により、当初の意義や役割は明らかに変化した。震災を知らない神戸市民が約4割に達するなど、人口構成も変わった。

こうした現状を踏まえ、震災を風化させないため、また、震災から学んだ教訓を次世代に伝え、これからの社会に生かしていくためにも、本研究は「神戸ルミナリエ」の現状に一石を投じ、一定の成果を残すことができたと考える。